

1. 本園の教育保育目標

保護者の協力を得て、多くの良質な体験を通して自信を持たせ、園児個々の成長目標を達成する

- ・心情(Feeling)の豊かな子ども…「感情表出」「愛情」「他への理解」「申告意欲」「試行意欲」「連帯意欲」「正義感」
- ・態度(Manner)の良い子ども…「挨拶」「謝罪」「感謝」「懇願」「自己責任」「選択責任」「勝者の義務」
- ・自主的に行動(Behavior)できる子ども…「規律遵守」「忍耐」「勇気」「責任感」「委任追従」「自己主張」「自己顕示」
- ・個性(Identity)豊かな子ども…「演出表現」「演技」「言語」「心情表出」
 「絵画制作」「興味・関心」「集中・熱中」「創造・想像」
- ・健康(Health)な子ども…「運動・体力」「走・跳・投」「泳・潜」「持久意欲」

2. 今年度、重点的に取り組む目標、計画

- ・処遇に応じた責務を果たし、人間性向上に努める
- 地域ニーズに合ったアプローチ活動を取り入れ、さらなるブラッシュアップを目指す
- ・収支の傾向を知り、収支共にフィードバックしながら達成

3. 評価項目の達成及び取り組み状況

評価項目(課題)	取り組み状況
① 処遇に応じた責務を果たし、人間性向上に努める	各クラスリーダーに若手職員を任命しサポート体制としてベテラン職員をサブに配置する体制をとった。同じように、三人行事のほか、歳時記にちなんだ行事や定例行事の責任者も同様に配置し、若手職員の育成に取り組んだ。他施設見学から刺激を受け保育研究を行った。アワードバンケットにて2件発表したうち1つ最優秀賞をいただいたことは評価に値する。
② 地域のニーズに合ったアプローチ活動を取り入れ、さらなるブラッシュアップを目指す	ファミリーデイ(地域子育て支援活動)の内容に子育てワンポイントアドバイスとランチビュッフェ試食を取り入れたことで、R6年度0歳児1歳児合わせて11名の新入園児が決定した。新しい試みとしてHPのほかにインスタグラムを活用し広報活動を行った。
③ 収支の傾向を知り、収支共にフィードバックしながら達成	四半期ごとに、収支の動向を確認し無駄の排除を進めたことで、プラスの収支目標は達成できた。待機児童の解消に努め、対応できる職員数ギリギリまで、0～1歳児を3月末まで徐々に受け入れを行い、定員の5%増となった

4. 学校評価の具体的な目標や計画の総合的な評価結果

保育研究を行う様々な機会にふれ、5Sの視覚化アイデアにより、職員一人ひとりの意識向上に繋がった。さらにお子さまの生活習慣や物を大切に扱う気持ちが深まり思いやりのある行動が増えた。保育活動の目標達成に向け、見通しを持った計画を立てる事に課題が見られていたが、内部監査にて、口頭指導や伝達が多いことを指摘され課題に取り組むべき事項が明確になった。取り組みとして、領域別達成目標を細部まで注意深く見直し改善を行い、指導事項や伝達を記録に残した。この効果については、来年度の保育内容が大きく躍進することで確認を行っていきたい。今年度は5年ぶりの海外研修参加や、自主的にアワードバンケット発表と現地参加経験により、3学期はお子さまの探求心や創造力が向上する教材準備や保育室環境の見直し、手作りおもちゃの増加など迅速な改善が行われたことは評価に値する。R6年度 新卒者採用ができなかったことは今後の課題となる。

5. 今後取り組むべき課題(次年度へむけて)

課題	具体的な取り組み方法
① 行事や領域別達成目標に向けて見通しを持った計画を立てる	過去のカリキュラムや保育の仕方にこだわらず、改定した領域別達成目標をフル活用し、達成のイメージから掘り下げていった見通しのある計画を立てる。
② お子さま一人ひとりの成長発達に合った保育内容を展開する	過去の保育展開に囚われず、一人ひとりのお子さまの発達段階に理解を深め、積極的に意見を発することで 新しい企画提案を統合しチームワークを深めて教育・保育展開を行う。試みとして異年齢保育を実施する。
③ 新卒者の職員採用をする	実習生への指導者の年齢層を低くし、指導方法を工夫する。さらに、養成校とのパイプ作り、就職フェア参加、インターンシップの積極的受け入れ、インスタやブログ、YouTubeなどを活用した広報活動を繰り広げ、採用に繋げる

6. 学校関係者の評価

令和5年度は金利のある世界、物価高、人手不足、超円安などが象徴するように、これまでの日本社会の転換点として位置づけられるような歴史的な変化が起きた一年であった。当法人の経営に対してはそのような社会経済環境の激変が大変大きな逆風ではあったが、前例踏襲、横並び、行政からの指示待ちという悪い慣行をかねてから排除して、自らが社会に評価されるように努めることを理事長が長年、推進して行動指針とされてきた成果が大いに発揮されたとも言え換えることのできる一年であったと総評できる。

当法人は傘下の施設間の人材交流やアワードバンケットに象徴される保育・幼児教育の研究開発・技術革新に注力し活発化することを通して、逆風下にあっても日本社会、保護者の方々、お子様に必要とされる保育・幼児教育への投資や研鑽を片時も止めることが無かった。更に、保育教諭・保育士・幼稚園教諭・栄養士・調理師・看護師・公認心理士、臨床心理士などが施設の壁を越えて連携できていることで、保護者の方々やお子様にとって必要な保育・教育の価値を提供できるサプライチェーンが切れ目なく整えられていることは当法人の強みであったと評価できる。

これらのことが今後も継続し、尚且つ発展的に展開していけるようにするためには人材の獲得と育成が大切であり、法人としては本年度も資源配分の多くを人に向ける努力をされたことは称賛に値する。

人材こそが価値創造の源泉であるとの思いから、物価高や少子化といった収益環境の悪い中にあっても当法人として将来不安をなくすための健全性の確保には、理事会・評議会も現場の方々寄り添いながら協力して努めてまいりたいと考えている。

令和6年3月26日 理事会・評議会